

ゴットフリート・ケラー研究  
『七つの伝説』における現世主義について  
長島冴恵（ドイツ語学・ドイツ文学）

本論文では、スイスの作家ゴットフリート・ケラー（Gottfried Keller, 1819-1890）の作品『七つの伝説（Sieben Legenden）』において、ケラーが無神論者ルートヴィヒ・アンドレアス・フォイエルバッハ（Ludwig Andreas Feuerbach, 1804-1872）の影響を受けて確立したとされる現世主義の立場について論じている。この作品はスイスの牧師ルートヴィヒ・コーゼガルテン（Ludwig Gotthard Theobul Kosegarten, 1758-1818）の作品『伝説集（Legenden）』を原典に持ち、人物名や構成、文体を多く借用している。フォイエルバッハの著作および、原典と『七つの伝説』とを比較して表れる改作箇所からケラーの思想観を明らかにする。

ケラーの作品には原典になかった恋愛関係が多く加えられており、人間の愛に重要な意味が与えられる。愛のモチーフはフォイエルバッハの著書の中でも度々繰り返され、心情は愛、人間が存在するのは愛するためとして人間の真の愛の回復が提唱されている。また、人間性に関して登場人物に固有の性格が与えられると同時に心理描写が増えたことで、出来事だけを並べた簡素な印象を受ける原典に対し、物語性豊かな作品になっている。人物の言動や心情が詳細に描かれることで登場人物への興味や共感がより読者に呼び起こされる。更に彼岸を否定的に捉えるケラーは原典で肯定的に描かれていた箇所に改変を加えることで此岸賛美への姿勢をより一層強調した。物語の結末に描かれる天上の崩壊がケラーの彼岸信仰に対する批判的な姿勢を象徴的に表現している。

ケラーは原典の登場人物を多様な人間性、恋愛関係を持たせて再生した。現世を生きる人々の恋愛関係を描くことで、人間的な真の愛と現世での自らに従う生き方の重要性を表現している。ケラーの現世主義とは生身の人間として自ら思考し、今生きている生を人間の愛によってより豊かにしようと模索する人々を理想としている。